紅葉先生逝去前十五分間

明治三十六年十二月

明治三十六年十月三十日十一時……、形勢不穏なり、予は二階に行きて、謹みて鄰室に畏まれり。此處には、石橋、丸岡、久我の三氏あり。

人々は耳より耳に、耳より耳に、鈍き、弱き、稲妻の如き囁を傳へ居れり。

病室は唯寂として些のもの音もなし。

時々時計の軋る聲とゝもに、すゝり泣の聞ゆるあるのみ。

室と室とを隔てたる四枚の襖、其の一端、北の方のみ細目に開けたる間より、五分措き、三分措きに、白衣、色新しき少看護婦、悄然として出でゝ、靜に、しかれども、ふら／＼と、水の如き燈の中を過ぎりては、廊下に彳める醫師と相見て私語す。

雨頻たり。

正に十分、醫師は衝と入りて、眉に憂苦を湛へつゝ、もはや、カンフルの注射無用なる由を説き聞かせり。

風又た一層を加ふ。

雨はたゞ波の漾ふが如き氣勢して降りしきる。

これよりさき、病室に幽なるしはぶきの聲あるだに、其の都度、皆慄然として魂を消したるが、今や、偏に吐息といへども聞えずなりぬ。

時に看護婦は襖より半身を顯して、ソト醫師に目くぼせ爲り、同時に相携へて病室に入りて見えずなれり。

石橋氏は椅子に凭りて、身を堪へ支ふること能はざるものゝ如く、且つ仰ぎ、且つ俯し、左を見、右を見て、心地死なんとするものゝ如くなりき。

（角田氏入る。）

人々の囁きは漸く繁く濃かに成り來れり、月の入、引汐、といふ聲、閃き聞えつ。

十一時十五分、予は病室の事を語る能はず。